

受番	験号
氏名	

一 次の文章を読み、後の問に答えよ。

深夜、近所のコンビニエンスストアに行ったら、インド系らしきふたりの男性を相手に、中国系の若い男性店員がATMの使い方を教えている。双方とも、みずからの母語とは異なるはずの言語を懸命に駆使しながら意志 **a** ソツウをしていた。買い物しながらさりげなく耳を **A**。別々の国からやってきた外国人同士が交わす日本語を聞くのが昔から私は好きなのだ。

「国籍」を唯一の **b** コンキョとすれば私も「日本人」ではないのだけれど。

私が、自分は日本人でないと意識させられる場面は限られている。三年に一度、日本での在留期間更新許可 **c** シンセイをするとき。空港の出入国カウンターで台湾 — **d** ゲンミツには中華民国 — のパスポートを提示するとき。もう十年以上前のことだ。

「日本人であることに縛られたくない」

と言った友だちがいた。バックパッカーとして数カ国を旅してわかったんだ、と彼は胸をはる。

「自分の居場所是世界だ」

私は食ってかかった。

「どこに行ったら日本人は日本人だよ。だって、その旅を可能にしているのは菊の花の **e** モンショウがついたパスポートでしょ。そんな簡単に日本人であることから逃げないよ」

うまれつき日本の国籍を与えられ、日本のパスポートを持つことが絶対的に保証される立場にある彼が「自分は日本人であることから自由なのだ」と **B** することが私にはどうしても許せなかった。当時の私は今以上に、<sup>①</sup> 日本国籍を天与の物と錯覚できる日本人に複雑な感情があった。自分ないものを当たり前のように持っているひとたちの、そのことに対する無自覚さに苛 **f** 立ちつつ、どこか **f** 羨んでもいた。ましてや、「**C**」なんて。苦い記憶を振り払いながら、 **g** チンレツされた商品とその値札を私は眺める。

ふと、買い物をするときの私は「日本円」という **D** に頼り切りだなと思う。

しょっちゅう行き来する台湾でも、商品の値札にある台湾ドルを頭の中で日本円に換算する **h** クセがいまだに抜けない。逆に台湾の **i** 従妹たちが日本に来たときは、電車の初乗り運賃やカフェでのキーキ代などをいちいち台湾ドルに計算しては、たかーい、と盛りあがっていた。ものの値段を実感するときは、自分が普段暮らす国の貨幣に換算するのが一番わかりやすいのかもしれない。

インド系の男性たちはATMを無事に使いこなせたようだ。店内はしんとする。私他に客はいなかった。レジでは例の中国系の店員が対応してくれた。名札に「張／チャン」とある。 **E** で話し掛けてみたいと思ったが、ポイントカードはありますか、と流ちょうな **F** で先に聞かれてしまう。煌々 **h** と輝く店内から外に出ると、ひんやりとした夜風が頬をさする。道の端で、先ほどのインド系のひとたちがおしゃべりをしていて。通り過ぎるとき、耳を澄ます。

**G** ではない。

たぶん、彼らの故郷の言葉なのだろう。

コンビニエンスストアのチャンさんの母語も、私の知っている **H** とは限らない。広東語や上海語あるいはもっと別の言葉。

世界にはさまざまな言葉が **j** 溢れている。

大多数の日本人にとって未知なる響きをたずさえて、彼らはやってくる。日本語と日本円を何とか使いこなしながら、日々を営んでいる。

そんなことを考えながら、自分は日本のパスポートは持っていないけれど、基本的に日本円しか通用しない領域で育ち、今も生きているのだと気付く。

法の上では「外国人」と扱われても、 **I** に慣れ親しんだ私自身は、この国—日本—を「外国」とは感じにくいのだ。

（『東京新聞』二〇一六年十一月七日夕刊の温又柔 **おんゆうしやう** の文章による）

問一 — 線部 a、j のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。

問二 **A** にふさわしいものを次の中から選び、記号で答えよ。

- イ 立ち上げる      ロ そむける      ハ かたよせる      ニ 大きくする      ホ そばだてる

問三 **B** にふさわしいものを次の中から選び、記号で答えよ。

- イ 推測      ロ 弁護      ハ 豪語      ニ 虚言      ホ 力説

問四 傍線部①の「日本国籍を天与の物と錯覚できる」の意味として適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- イ 日本の国籍は自分の意志で選択したものではないから、みずからの意志では変えられないと思っている。  
 ロ 日本の国籍は自分の意志で選択したものではないから、みずから問い直すまでもないことと思っている。  
 ハ 日本の国籍は自分の意志で選択したもので、みずからの意志で変える権利があると思っている。  
 ニ 日本の国籍は自分の意志で選択したものなのに、みずからの意志で捨てることは愚かだと思っている。  
 ホ 日本の国籍は自分の意志で選択したものではないのに、みずからの意志で獲得したものだと思っている。

問五  C にふさわしいことばを、本文中から探して八文字以内で答えよ。

問六  D にふさわしいことばを次の中から選び、記号で答えよ。

イ 基準      ロ 規準      ハ 規順      ニ 規測      ホ 基礎      ヘ 基本

問七  E、 F、 G、 H のそれぞれにふさわしいものを次の中から選び、記号で答えよ。なお、同じ記号で複数回答してもかまわない。

イ 日本語      ロ 中国語      ハ 英語      ニ インド語

問八  一 にふさわしいことばを、七文字で答えよ。

二 次の文章を読み、後の問に答えよ。

専門は？と問われて、心理学だと申しますと、「心理学の何が専門ですか」と尋ねられることがよくあります。「発達心理学です」と答えますと、「ああ、そうですか」とすんなり分かっていただけのこととはあまり多くはありません。えー？と考え込まれたり、「では、子どもの研究をしているのですかね？」と言われたりすることがしばしばです。「子どもの研究ですね」といわれますと、「そうです」ともいえず「違う」ともいえず困惑してしまいます。そこで「子どもの研究もしましたが、今はおとなー特に中高年の男性と女性に関心があります」と申しますと、一層混乱される向きもあるのです。

心理学でも社会心理学や性格心理学、臨床心理学などの場合は、そう混乱なく理解されるようですが、発達心理学はどうも分かりにくい―その一因は「発達」という言葉が日常的に耳慣れないこともあるかもしれません。「発達」とは日常的表现では「成長」とか「育つ」ことですが、これは身長や体重、瞬発力など身体面の場合に使われてきたことから、心理学が扱う心や行動には「発達」という語が使われるようになったようです。

さて、発達とは心や行動の成長だとなりますと、それは子どもだとすぐ思いつくでしょう。五〇センチほどで産れ泣くほかは何もできなかった赤ちゃんが、たちまち身長も体重も増え、いろいろな音声や表情で自分の意志や喜怒哀楽の感情も表現するようになるなど、他の時期にはみられない子どもの成長ぶりには誰もが強烈な印象を受けます。そこで、成長、発達という子どもと連想するのは無理ありません。しかし、これが発達についての誤解の一つです。

もう一つの誤解の元は、子どもとおとな／親との関係から来ています。子は未熟無能で育てられる、他方、育てる親やおとなは子どもに比べて有能です。この「育てられる子―育てる親／おとな」の対比が、おとなは発達がすでに完了しているとの錯覚を招きやすく、発達は子どもの問題であり、大人の問題ではないと見なすことになりがちなのでしょう。

同様の誤解は学問の世界でも長いこと続いてきました。心と行動の発達を扱うのは児童心理学や青年心理学で、おとなになるまでが研究の対象でした。それがおとな以降も発達し続ける事実が注目されるに及んで、成人したのち死に至るまでの一生が発達研究の対象となり、生涯発達心理学といわれるようになったのです。

成長／発達は子どものみならずおとなの問題です。人が自分の存在に意味を認め生き甲斐を感じる基盤は、自分が成長しているという実感です。発達は人が生きていく証しです。よく、「〇〇さんから「影響を受けた」「〇〇に「育てられた」「〇〇から「学んだ」などといいます。自分の歩みを振り返ると、誰しもそう思う経験があるでしょう。私たちはさまざまな人との交流や体験によって、それまではなかった力や知識を得ます。能力や知識だけではありません。それまでの生き方に変化を迫られもします。この「影響を受けた」「育てられた」「学んだ」という変化こそ、発達にほかなりません。ただし、おとなの発達は子どもの場合のようにみるみる増える、どんどん巧くなるといったものとは限りません。それとは質的に違った特徴をもっています。その一つが、以前していたことをしなくなる、できなくなることです。この消失／衰退という変化は、新しい心の働きや行動の変化をもたらす積極的な変化です。これはおとな以降の発達に顕著な特質です。

このような意味で人は生涯発達します。そしておとなが発達していないことは、本人はもちろん、家族や職場など周囲の人々にも影響が及び、問題が生じます。今、日本ではおとなの発達がうまくいっていない現象が諸処にみられています。

生涯発達心理学の誕生と発展は、近年の高齢化を抜きには考えられません。たかだか人生五〇〜六〇年だった時代には、おとな以降の発達をあえて問題にする必要はありませんでした。発達はおとなになる前の子どもや青年を研究すること、それ以降については性格心理学や社会心理学などおとなを対象とした研究で十分だったのです。

高齢化によって、それでは済まなくなりました。高齢化するおとな以降の期間の延長は、「おとな」と一括しきれない長い時期に生じる心と行動の変化発達を正面から研究する必要性を提起しました。例えば「いつまでも働きたい」と思う人の希望を充たすには、加齢にともなう心や能力の変化を知る必要があります。さもないと適切な労働条件の整備はできません。また高齢者の幸福のためには、その心身の状態を明らかにした上でどのような生活の整備と支援が必要かを見定めることも発達研究の課題です。このように、発達心理学は高齢化社会の産物ともいえるでしょう。

(柏木恵子『おとなが育つ条件―発達心理学から考える』〔岩波新書・二〇一三年〕による)

問 次の a〜j それぞれについて、筆者の考えと一致しているものには○、一致していないものには×をつけよ。

- a 「発達心理学」という分野が子どもを対象とした学問であるということとはまったく知られていない。
- b 「発達心理学」という分野が中高年の問題を扱っているということは一般にはよく知られていない。
- c 「成長」や「育つ」が身体面の変化について使われるのに対し、「発達」は心や行動の変化について使われる。
- d 「発達」は日常的には耳慣れない言葉であるが、「育つ」や「成長」という言葉に置き換えると理解しやすい。

- e 発達心理学は子どもを対象とした学問のようにとらえられてきたが、おとなについてもその対象と考えられるようになった。
- f 発達心理学は子どもの成長に関する学問であり、おとなの心理を扱うのは社会心理学や性格心理学の領分である。
- g 人はその生涯にわたって思考力や行動力が伸長し続けるからこそ、おとなを対象とした発達心理学が求められている。
- h 高齢化により、消失や衰退にともなう心の働きや行動の変化が生じるからこそ、おとなを対象とした発達心理学が求められている。
- i 働く人々の高齢化にともなう労働意欲の減退が目立つようになったことで、生涯発達心理学の必要性が高まった。
- j 働く人々の高齢化にともなうその働きやすい環境を整える必要が高まり、生涯発達心理学の研究が求められるようになった。